

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 5 月 24 日現在

機関番号：31302

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520826

研究課題名(和文) 東北三陸社会の資源活用・生業知と大規模イ工経営体の歴史学的研究

研究課題名(英文) Historic study of the large-scale family management about the Sanriku district, Japan.

研究代表者

齋藤 善之(Saito, Yoshiyuki)

東北学院大学・経営学部・教授

研究者番号：00196023

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円、(間接経費) 1,110,000円

研究成果の概要(和文)：近世の三陸地域に大規模家経営体が卓越したのは、その力量によって大自然(山野河海)の豊富な天然資源を開発しえたからであり、とりわけ両者の資源を連関させることで相互の開発を促進するしくみを創出保持できたからである。そうした大規模家経営体は辺境な地理的環境にありながら海運業や遠洋漁業をとおして広い地域との交流関係をもち、所有船などの輸送手段を介して遠隔地とも直接通交する力をもっていた。それにより都市との間の物流を実現したのみならず、最新の技術や文化を地域社会にもたらず窓口になり、三陸地域社会の自立と発展をもたらす原動力となっていたのである。

研究成果の概要(英文)：A lot of large-scale family managements appeared in the early modern Sanriku area, Japan. The large-scale family management had power to develop the natural resources which were rich in the Nature (fields and mountains the river and the sea). The large-scale family management pushed forward mutual development by joining the resources of a mountain and the sea together. The large-scale family management existed in the place that was a border, but had interchange relations with a large area by the shipping trade and pelagic fishing. The large-scale family management commuted with the far-off place ground having a ship directly and realized the distribution between the city. The large-scale family management brought the community the latest technique and culture and brought independence and the development of the community.

研究分野：日本史

科研費の分科・細目：基盤研究(c)

キーワード：日本近世史 東北地方 大規模家経営体 産業史 生活史 文化史 災害史

### 1. 研究開始当初の背景

近世日本の社会経済史は、単婚小家族による労働集約型農業経営の展開による「小農自立論」の枠組みで説明されてきた。このような小農経営の展開は、畿内の「先進地帯」から始まり、やがて全国に展開するなかで、近世村落固有の歴史的景観を生み出していったとされる。したがって各地方における「小農自立」の展開度はその地域の「近世化」の指標とされた。そのため近世の東北地方にみられた大規模家経営体については、農業と商業の両面から、ともに東北社会の後進性の象徴とされてきた。本研究ではそのような見方に見直しを迫り、むしろ三陸地域のような大自然が卓越した社会にあっては、一定程度自給自活できる自立完結的な経済単位としての大規模家経営体という存在が、平時には自律的な開発拠点として機能し、非常時には危機に立ち向かい地域社会の生存を確保する防災拠点として機能していたのではないかという仮説から調査研究を進めたい。

そこで三陸の大規模家経営体であり膨大な古文書史料を残している千田家の古文書調査を進めつつ、その全体像の実態分析をふまえて歴史的意味を再考することが求められている。

### 2. 研究の目的

本研究では、東北三陸地域の海村社会とそこに出現した大規模イ工経営体を研究対象とし、当該地域に豊富に存在した天然資源を開発・生産から流通・消費までを構造化することで資源として活用しうるメカニズムの生成展開の歴史的過程を解明する。東北地方は、豊富な資源を供給することによって日本社会の存続を支え続けてきた。本研究ではそのような役割に注目しつつ、東北社会を特徴づけた大規模イ工経営体について、当該社会に固有の生産と消費の連環構造、および生産技術や生活知が果たした役割について、主に経済史、技術史、生活文化史的な側面から解明する。それにより東北社会が、環境の変化や災害にいかに対応しつつ維持再生してきたのかを明らかにし、持続可能社会のあり方についての学術的知見を獲得したい。

なお本研究申請後(2011年3月11日)に発生した東日本大震災により、当該地域の大規模イ工経営体の歴史遺産(遺構、遺物、資料)は大きな被害を受けた。こうした現状をふまえ、それらの被害調査をも研究目的に加えることとし、そのうえで過去の地震津波の資料についてはとくに意識して蒐集に努め、それら歴史的災害の実態解明と大規模イ工経営体の歴史的役割について考察をふくめて上記の課題に迫ることを目的とする。

### 3. 研究の方法

次のような5つの研究活動を実施する。な

お連携研究者として篠宮雄二(中部大学・人文学部・准教授)と鎌谷かおる(神戸女子大学・文学部・非常勤講師)の両氏の研究協力を得る。

)岩手県大船渡市綾里の千田家に残された古文書のデジタル写真画像をおこない、研究代表者および連携研究者ならびに研究協力者の協同作業により必要な史料の解読と翻刻の作成を行う。

撮影画像から、研究代表者および連携研究者・研究協力者がそれぞれの研究関心をもとに史料の選択と解読を行い、大規模イ工経営体の多様な機能と資源化との関わりを明らかにする。その際、研究代表者・齋藤善之は経済史分野を、連携研究者・篠宮雄二は技術史分野を、同・鎌谷かおるは生活文化史分野を主に担当する。

内部の研究会を開催し、参加者の分析視角による研究成果を報告し合うとともに、研究視角の共有をはかる。

現地でのフィールドワーク調査・資料調査(写真撮影)を実施し、古文書史料から得られた知見と現場での状況を検討する。

宮城歴史資料保全ネットワークおよび大船渡の市民有志との交流研究会を開催し、研究成果の共有をはかりつつ、本研究が構築する歴史像について検証する。

### 4. 研究成果

本研究では夏に研究代表者・連携研究者を含む8人ほどが参加して現地での宿泊調査を実施した(3泊4日×3回)。調査対象は大船渡市三陸町綾里の千田基久兵衛家で、主として同家の江戸時代以来の未調査古文書の撮影を行った。撮影した画像総数は70214コマでこれにより同家文書の全点撮影が完了した。そこから基礎史料を翻刻し105頁(A4版)の翻刻史料集を作成した。また撮影された古文書画像データを用いて、年度末の春期に1泊2日規模の研究報告会を合計3回実施し、現地調査に参加したメンバーによる研究報告と討論を行なった。最終年度の8月の現地調査の際には千田家の座敷において地域住民向けの調査成果の報告会を実施し、地域住民30名ほどの参加を得た。

なお最終年度の研究報告会における参加者の報告として次のようなものを得た。

齋藤善之(研究代表者)「三陸地域社会の大規模家経営体の存在形態」、鎌谷かおる(連携研究者)「三陸地域「家」の歴史を考える - 千田家を事例に -」、篠宮雄二(連携研究者)「綾里村における在村工業の展開と千田家」、中村只吾(東北芸術工科大学東北文化研究センター専任講師)「千田家における漁業経営について - 明治前半期を中心として -」、井上拓巳(さいたま市大宮盆栽美術館主事)「千田家の鯉節取引 - 各地の商人との取引関係から -」、芹口真結子(一橋大学大学院社会学研究科博士後期課程)「仙台藩にお

ける大時化施餓鬼供養と気仙地域」、小関悠一郎(千葉大学教育学部准教授)「千田家蔵書にみる家・地域の知」、安田容子(東北大学災害科学国際研究所助手)「千田家・小松家蔵「二十四孝図屏風」と千田家の美術資料について」である。

これらの研究から明らかになったことは、当地に大規模家経営体が立地しえたのは、その組織と力量によって地域の海山の豊富な天然資源を開発しえたからであり、とくに両者の資源を連関させ相互の開発を促進するしくみを創出保持しえたことよることが分かってきた。また大規模家経営体は辺境な地理的環境にありながら海運業や遠洋漁業をとおして広い地域との交流関係をもち、所有船などの輸送手段を介して遠隔地とも直接通交する力をもっていた。これにより最新の技術や文化を地域社会にもたらす窓口になっていたことも明らかになってきた。

なお千田家は東日本大震災津波で床上浸水の被害を蒙った。被災状況の調査(写真と聞き取り)により、歴史的な存在たる大規模家経営体が今時の大震災下で強い抵抗力、復元力を発揮し地域社会の存続に寄与したことが明らかになった。その地域ネットワークも災害支援に大きな力を発揮しており、危機の下での地域社会の存続、その後の共同体再建へについても様々な示唆に富む研究成果となった。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計9件)

1) 齋藤善之「南三陸地域における大規模家経営体と危機対応」『歴史評論』764 歴史科学協議会編、2013年12月 19~32p

2) 齋藤善之「古文書に見る仙台北下の商業情勢の変容と通町・堤町」平川新編『よみがえる町の記憶』東北大学東北アジア研究センター、2012年2月、23~50p

3) 齋藤善之「尾州廻船内海船からみた下関」山口県史編さん室『山口県史の窓・資料編幕末維新5』2012年3月、4~11p

4) 篠宮雄二「田中民部の墓と石碑 - 民間信仰と領主権力 - 」『新修豊田市史だより』第10号、2012年7月、5~6頁

5) 篠宮雄二「近世における矢作川水系の鮎漁と漁業争論」『豊田市史研究』第4号、2013年3月、41~56頁

6) 鎌谷かおる「日本近世における山野河海の生業と所有-琵琶湖の漁業権を事例に-」「日本近世における生業と地域秩序形成の

研究」『ヒストリア』第229号、2011年12月、査読有、114-142頁

7) 鎌谷かおる「大庄屋鶴野金兵衛家の金融活動と地域社会」『神女大史学』第28号、2011年11月、査読無、171-191頁

8) 鎌谷かおる「近世琵琶湖の漁業と漁村 堅田漁師を事例に」『歴史と民俗』第29号、2013年3月、査読無、91-109頁

9) 鎌谷かおる「日本近世の内水面漁業における禁漁場について-琵琶湖を事例に-」『国際常民文化研究叢書』第2巻 神奈川大学国際常民文化研究機構、2013年3月、15-20頁

〔学会発表〕(計2件)

1) 篠宮雄二「日本近世における河川漁業と在地秩序」近世史研究会(名古屋大学文学部)2011年6月

2) 篠宮雄二「右近家八幡丸建造再考」第26回全国北前船セミナー(加賀市セミナーハウスあいらす)2012年8月

〔図書〕(計2件)

1) 菊池勇夫・齋藤善之編『講座東北の歴史・第4巻交流と環境』2012年9月、全315頁

2) 齋藤善之「三陸沿岸地域における歴史的景観と生業」野村俊一・是沢紀子『建築遺産 保存と再生の思考 - 災害・空間・歴史 - 』東北大学出版会、2012年3月、445~470p

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

齋藤善之（東北学院大学経営学部教授）

研究者番号：00196023

(2) 研究分担者

(3) 連携研究者

鎌谷かおる（神戸女子大学文学部講師）

研究者番号：20532899

篠宮雄二（中部大学人文学部准教授）

研究者番号：60293677